○先生　緒方さん
○緒方　ひく。
○先生　此内で今度は÷と×とどちらが数が多くなるかの。江藤さん。
○江藤　わる。
○先生　まだ違ふ人。春本さん。
○春本　倍。

（鐘鳴る）

○先生　今日は皆色々算用しましたらう。……まだ〳〵……今日は小野さんどんな算用をしたか。

（がや〳〵言ふ）

今日は筆の算用、鳥の算用もしましたらう。

△禮。

（珍らしい御投稿を感謝致します。此生徒達が今皆紳士になつて居りますが是を見たらどんなに驚くことでせう。

尚練習帳は本誌に掲げることが出来ませぬが、學生一同非常な興味を以て拝見しました。厚く御禮を申述べます。

係）

（編集者附記）

○原文のまゝを期し、仮名づかいは勿論、漢字も当時（昭和五年）の旧活字体によりました。

○文中の人名、特に二年生の氏名消息につきは幸い菅一郎氏にきき、又佐伯小学校の卒業名簿によりましたが、不明の方もありました。脚註、誤りの点御教示下さい。

○郷土の教育史の資料としても面白く興味なきまでです。浮校関係に配付の予定です。

△授業終りの礼
（教師の合図によって起立し、礼をした）

研究

肥後に落ちた惟栄と統幸
―林田氏の研究について想う―

会員　佐賀一

去る十月中旬、熊本県下益城郡松橋町の林田憲義氏から一通の親書を頂戴した。林田氏は同地の郷土史家で、さきに羽柴先生からお名前を聞いていたので、何事だろうと開いたところ大略次のような文面でした。

「私の町の浦川内というところに緒方惟義の墓と称する墓のがあり、遺跡や伝承も残っており、又子孫という家も数家存在しております。更に又萩尾という所には佐伯惟定の弟統幸が来住土着し、その子孫とよばれる数家もあり、ここには統幸以後の系図も残されています。これらの事について調査を開始致しましたが、この両人共に郷地地方の人物のこととて、私の県には何らの資料がなく、もつとも東鑑とか源平盛衰記或は平家物語、更には西国太平記などがあるにはありますが、極めて皮相の事のみしか書かれておらず……云々」

と、私が佐伯史談誌上に発表した『大神姓佐伯氏の系図』について説問された。私は旧稿を点検し、いたらないところを正補して十一月上旬、林田氏あて送ったが、萩尾というところにある佐伯統幸の子孫について詳細が知りたく、その子孫の系図写しを御恵贈下さるようお願いした。林田氏は折返しさつそく御返書下され、肥後国誌その他史料にある緒方惟義に関する伝承、佐伯統幸家の伝承、系図などを送つてよこされた。この史料は私どもの佐伯氏研究にとつて極重要な事柄と思うので、以下これを復写

して同志の参考に供することを希望する。

〔伝 緒方三郎墓〕

肥後国誌下巻 下益城郡河江手永浦川内村の条に『緒方三郎墳』として次の記事あり。

当村外に一根七株の大杉あり、(宝暦五年大風に砕け今はなし)、是緒方三郎惟義が墓と云伝う。墓石あれども銘文消滅して不分明。此石碑は三町ばかり北にある石橋なりしが、怪しき事もありて惟義が墓石なる事を知り、享保の始め取除けおきしという。俗説、惟義晩年当地に来住し、其の所今は〝城戸の内〟と称し、射場の跡等もあり、此所に死すと云う。又惟義が家老の墓と云伝えて、桜の大樹あり、墳石なし。享保十八年の春、貧民この桜にからまる葛根を掘りしに、大なる瓶棺を抱ける葛根を得て食しければ、其の男子忽ち狂気して喃々なりし故、愈々その奇を知れりと云伝う。

(補)緒方三郎惟義は豊後の住人也。東鑑曰、治承五年二月二十九日丙午於鎮西有兵事。是肥後国住人菊池九郎隆直、豊後国住人緒方三郎惟義等反平家之故也。

云々、其後惟義当国に来住する事考叡なし。

浦川内村は現下益城郡松橋町大字浦川内、墓石のあるところは其の小部落川床で、そこの入口の橋のたもとに幅三〇cm余、厚二〇cm余、高さ一四〇cm余の無刻銘(銘文消滅か)の板碑があり、これを惟義の墓と呼んでいる。前記引用記事中『怪しき事もありて』はこの墓石と云伝えるものが、石橋石材として用いられていた頃は『この上を乗馬にて通過すれば馬忽ち狂い必ず落馬す』と伝えている事であろう。因にこの川床部落には緒方を称する者が六、七家を数える。

〔佐伯家伝と佐伯系図〕

佐伯統幸の子孫と伝える家は松橋町大字萩尾の北萩尾に、現在佐伯及緒方を称して八家、他町村に移住した者の数家がある。その本家と伝うる佐伯吉久馬宅に伝うる家伝及系図は次の通り。但し系図は当代まで記入されているので、これは最近の調製になるものと思われる。

(佐伯家伝)

佐伯家祖は阿蘇家臣久志野玄蕃丞にして、家没落と共に萩尾に帰農す。玄蕃丞に子無く、養子佐伯矢右衛門尉統幸は、元亨(ママ)大明神の佐伯権之助(藤正)惟定の弟にして、豊後鶴見原実相寺合戦に主家大友左兵衛督義統に従って敗れ、主家没落後縁故の益城郡飯田山(いいださん)常楽寺の安足法印を頼って肥後に下向、法印のすすめによりその従弟久志野玄蕃丞の養子となる。

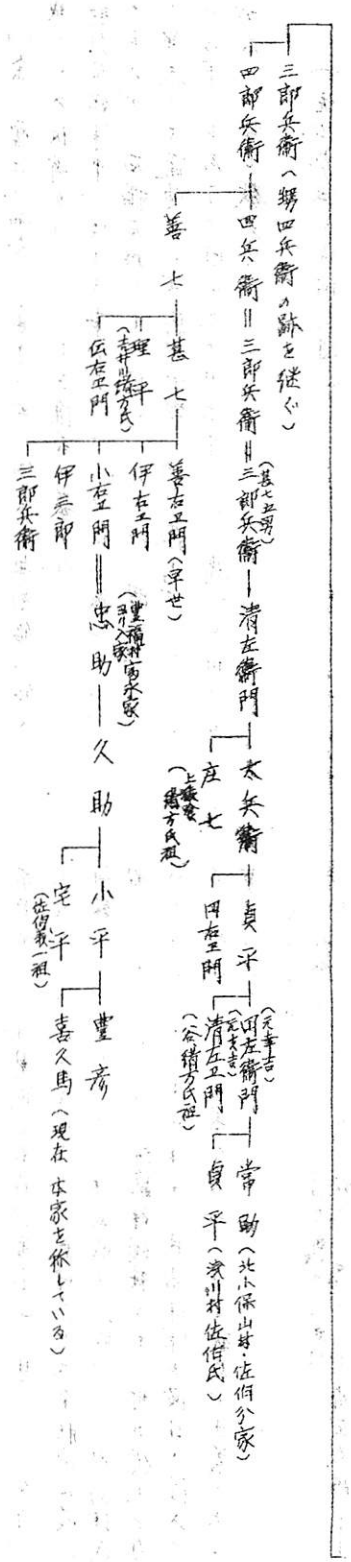
養父玄蕃丞の墓は萩尾山口の大楠(註大正十三年天然記念物指定、根廻り一〇七尺、目通り幹周五四尺、樹高七〇尺、枝張九〇坪、昭和二十四年伐採)の空洞(約八畳敷)の中に建立す。

統幸、太良右衛門と改め、慶長十三年加藤氏領主の時、萩尾村支配役仰付けられ、細川氏の寛永十一年御奉行志賀勝兵衛及松岡文太夫を通じ、北萩尾村庄屋役仰付けられ、以来代々庄屋役を勤む。(後略)

家伝中の養父久志野玄蕃丞とあるは、肥後国誌に『阿蘇家臣堅志田神園城主串野玄蕃丞』と見えている者で、天正元年相良氏を先鋒として島津氏が大挙肥後に侵入し、阿蘇氏を攻めたとき、神園城も落城。その後島津氏が一揆兵をおさめた後は阿蘇神領萩尾十八町の領主となって住いたもの。天正十四年十二月島津軍五度目の侵入で阿蘇氏は壊滅没落、玄蕃允はそのまま萩尾に土着したものと考えられる。

(佐伯家系)

○久志野玄蕃丞(元阿蘇家臣)=佐伯矢右衛門尉太良右衛門 統幸(養子)—清左衛門—



（附記）林田氏はこの家系図について史資料として大した価値は認められないとしているが、いわゆる系図屋の手になる移御された系図らしい系図よりは信じてよいのではなかろうか。

緒方三郎惟栄は源平盛衰記、平家物語等には惟義、東鑑、鎮西要略などには惟能と書かれ、戦記、稗史類によって文字が異っているが、豊後地方に残る大神姓緒方、佐伯系図のほとんどは惟栄と書いているから惟栄と正当としてよいのではなかろうか。惟栄終焉の地については碩田本系図には『上州沼田庄配流、後勅免再帰国豊州佐伯住』とあり、緒方系譜考には『墓所速見郡山香郷下村路傍』にあり。寿永年中平家一門檀浦合戦の時惟栄一族豊前に発向、宇佐宮に放火乱暴の旨帝聞召され上州沼田庄に配流、後宥免され佐伯に帰る途次速見郡に卒去す。』また豊後国志には『緒方惟栄墓在山香郷下村路傍』、速見郡志には『緒方三郎惟栄之墓在立石』惟栄被流於上野沼田、而後蒙帰国命、有子細而終焉』とある。なお鎮西要略によると惟能は平家追討の功を認められて罪を許され、帰国の後佐伯庄に居住したことになっている。いま林田氏よりもたらされた伝承によると、惟栄は肥後益城郡に亡命したことになるが、終焉地に疑問が多く、佐伯地方には近臣山本源太有明がその菩提を弔ったとか、羽明山龍護寺であるという伝説以外に惟栄に関する伝承は多いから、豪傑緒方三郎についてはもっと多方面に亘って研究されなければならない。

佐伯統幸については通称を進士（佐伯在住時代）後又左衛門（紀州浅野家に仕えた時代）また兵右衛門尉（佐伯退去後）といったという以外にはその後身については知るところがない。林田氏から提示された佐伯家系によると、兵右衛門尉統幸は慶長七年九月の石垣原合戦（観見原実相寺合戦と記されているが）に大友義統に従って戦い敗れ、縁故をたどって肥後に落ちたことになっているが、統幸の佐伯退転は文禄三年と思われ、慶長征韓の役に兄惟定が藤堂氏の客将として従軍しているのを考えると、おそらく浅野幸長の家臣として従軍したのではないかと思う。石垣原合戦に義統の軍師として従軍したのは、吉弘嘉兵衛尉統幸と同名であるから混同したのではなかろうか。